

ない様に白いふつくりとやせさへ見ねぬ愛らしいその顔を見ては、なる程死にたむなからう。ほんちに生の執着が強からうと、思へば思ふほどたまらなくなつた。

「あゝほんにね、さうでせう。さうでせう。御開山様だつてたのしいお浄土参りなのに、いそいで死ぬ氣も起らぬとおつしやつたと聞いて居ります。さうおつしやるのがほんとうです。死にたいと言ふのはにせものです。死にたくないのがあたりまへです」

おばさんはもう君子さんの顔を正視するにたねなかつた、目をそらしてそつと涙をふいた、さうして静かに歎異鈔の御言葉を讀んだ。

「マタ浄土へ、イソキマヒリタキコ、ロノナクテ、イサ、カ所勞ノコトモアレハ、死ナンスルヤラントコ、ロホソクオホユルコトモ、煩惱ノ所爲ナリ、久遠劫ヨリイマ、テ流轉セル苦惱ノ舊里ハ、ヌテカタク、イマタムマレサ

ル安養ノ浄土ハコヒシカラスサフラフコト、マコトニヨク〜煩惱ノ興盛ニサフラウニコソ、ナコリオシクオモヘトモ娑婆ノ縁ツキテ、チカラナクシテオハルトキニカノ土へハマヒルヘキナリ、イソキマヒリタキコ、ロナキモノヲ、コトニアハレミタマフナリ、コレニツケテコソイヨ〜大悲大願ハタノモシク往生ハ決定ト存ジサフラへ……」

そして沈黙がついた。息苦しい沈黙、おばさんは君子さんが今夜はこのまゝで安眠することが出来ればといふ望みの外には、逃れ道がなかつた。

「おばさん」
と呼ばれてハット我にかへつた。

「おばさん」
二度も呼ばれておばさんは返事をしない譯にはいかなかつた。

「はあ………」と苦しい返事をしたおばさんは、次の君子さんの言葉に思は

ず胸をうたれた。

「おばさん、——私ほんとうにはづかしい事を言つてゐました。どうしてあんな事を言つたのでせう。私佛様を忘れてゐました、氣が狂つたのですわ、ほんとうに悪うございました。かねて結構なお浄土だとは聞いてゐながら、……しにたむないの煩惱が、一杯はびこりて……あゝ佛様にだかれて楽しいお浄土参りの事をどうして忘れてたのでせう、お浄土に行つてお父さんやお母さんに又あへる事も忘れてゐました。お父さんやお母さんに會ひたいね、あゝ……ほんとうにすみませんでした。許して下さい、すみません……。おばさん私がこれからあんな氣狂ひぢみた事を言つたら叱つて下さいね……。南無阿彌陀佛くくく」

おばさんは思はず涙をうかべて言つた。

「まあ、よく言つて下さいました。南無阿彌陀佛くく、よく言つて下さいま

した、どうぞよろこんで下さい」

「ありがたうよ、ほんとに大悲の佛様にいだかれて行きますよ、私さきに行つてまつてますわ」

「ありがとうございます、私もあとから参ります」

「ほんとに又あふ機會が段々近くなりますわね、私は何といふしあわせ者だつたでせう。色んな人にお世話になつたわ。皆々親切にして下さつたわねお父さんお母さん（調和上御夫妻のこと）によろしくね。水島先生にもほんとお世話になりました。それからまあ數へ切れない程あるのね、皆さんによろしく言つて頂戴ね。又お浄土でお目にかゝりますわ……。おばさん、おばさん、どうしたの……。あら泣いてゐるのぢやなくつて？

まあ」

おばさんはもう泣けてくく仕様がなかつた。

「なせ泣くのですか、よろこんで頂戴」

「いゝ泣くのぢやありません。たゞ何んとはなしに涙が出ましてね」

かうして感謝と喜びに充ちた夜は更けて行つた。につこりとほゝねんですやゝと眠つて行つた、君子さんの様子はこの世のものは信せられない程尊かつた。

それから臨終まで二日の間、うす汚ない隔離病棟の一室も絶間ない御恩報謝、美しい念佛の聲に清くかゝやいた。君子さんの目にふれる物、頭にうがぶ物、皆すべてが感謝の種であつた。時々こみあげて来る様な腹のいたみも、息のつまる様な胸の苦しきも、お浄土参りの呼び聲かと聞こわてかこつ気にはなれなかつた。何と云ふ氣高い姿だつたらう。死を一二日の前に控へて苦しいの一語も發せず、只よろこびの念佛の中に生きて行く姿、五日の晩に急をきいてかけつけた、門司の叔母さんが見わたした時など

「私の顔をようつく見て居つて下さい。ほうら、こんな顔よ」

なごど面白げに語つた。どうしてもこの人が死の宣告を受けた人とは思へなかつた。しかしどうくその日が来た。六日の晝頃から腹膜炎が急に激しくなつて、本人も他の人ももう死の間もない事をうなづかづにはおられなくなつた。しかしもう君子さんはあせらなかつた、只念佛をとなへるだけであつた。時々思ひ出しては、あの人にもよろしく、あの方にもお禮を言つてと、こまかく心を配つてゐた。七日の早朝君子さんの息づかひが急にはげしくなつて始て苦しみの表情が顔を走つた。

「おばさん、苦しいく、先生を……」

おばさんが立たうとすると、

「いやく、おばさん、行つちやいや、こゝに居て……」

といふのも虫の息、門司の叔母さんが部屋から飛び出して行つた。つきそひ

のおばさんは、心ははやるがもうどうする事も出来ない、たい君子さんの胸のあたりをなでながら泣くのみだった。

『ゆるして〜ください、君子様、この世の事ならどんな事でも致しますが、代つてもあげますが、……こればかりはもうどうする事も出来ません。どうか勘忍して下さい、勘忍して下さい。もうすぐに御浄土ですよ、もうすぐにその苦しみがなくなりますよ。……ゆるして下さい……南無阿彌陀佛〜』

おばさんは手を合せて拜んだ。君子さんはもう聲が出ない、片手をあげて拜む様な身振りをした、きつと心の中では『ありがたう、ありがたう、永々お世話になりました、皆様ありがたうございました。お先にお浄土に参らせていただきます』といふつもりだったのだらう。

かうして君子さんは、たつた十分間の苦しみの後、醫者の来る間もなく、

あの病棟の一室で、おばさんの念佛の聲に送られながら、二十三年の短い世を終つてしまつた。……丁度午前六時二十分……

けれども君子さんの美しい心はすぐに又この世に還つて我々を救つて呉れるにちがひない。……あゝ還相廻向よ！ 南無阿彌陀佛。

(昭和四年二月十日君子さんの葬儀の夜洗心學會にて 宗夫記)

淨薫法尼

凡てに感謝し、凡てを感謝して最後の微笑をこの人世の地上に印して私達に多くの教訓を興へて今現に西方の花臺に微笑つゝある微妙院釋淨薫法尼に感謝いたします。

六 凡てを如來の方便として受け入れたる人

痼疾の病人

病氣、殊に最もいやな最もいまはしい病の手に捕はれたる人の如きは、どうしても我身の不運を啣ち、人世の不如意を歎き健康な人達に對する羨みの情や嫉妬の思ひのつきないのが當り前の事であります。然るにそれをそれと

してそのまゝの上(うへ)に一つの光(ひかり)をみとめ尊(たふさ)き感じ(かんじ)を味(あぢ)ひうる者はこれ(もの)も亦(また)如来(にょらい)を頼(たの)み未(み)來(らい)往(わう)生(じやう)を悦(よろこ)ぶ者(もの)の特(とく)權(けん)と云(い)はねばならぬのであります。

私(わたくし)にはかういふ體験(たいけん)を持(も)つてゐるのであります、それはあまり極端(きょくたん)な例證(れいじやう)であるためその所(ところ)とそ(その)の姓名(せいめい)とを省(まよ)くことを許(ゆる)して頂(いた)き度(た)いと思(おも)ひますが、その人(ひと)は年僅(としわづ)かに三十(さんじゅう)を越(こ)すこと四(よ)つ、早(わ)稲(い)田(だ)大(だ)學(がく)を出(で)た人(ひと)で、經(けい)濟(ぎ)的(てき)に惠(めぐ)まれた富(ふ)裕(ゆう)な家(いへ)の而(しか)もそれ(それは)は長男(ちやうなん)であつたのであります。然(しか)るになんといふ情(なさ)けないものであらうか、宿業(しゆくごふ)といはふか、因緣(いんげん)といはふか、私(わたくし)は殆(ほとん)ど筆(ふで)をなげうちたい様(やう)な心持(こころもち)が致(いた)しますが、この人(ひと)は世(よ)にも最(も)も哀(あは)れな病氣(びやうき)の患(わづ)者(じや)でありまして、さうしてそれが最(も)も性(せい)質(しつ)の悪(わる)いもので極(き)めて急(き)激(げき)に進(すす)んで來(き)たのであるとの事(こと)であります、私(わたくし)が道(みち)の話(はなし)をするべく初(はじ)めてこの人(ひと)に會(あ)ひました時(とき)でさへ兩方(りやうほう)の指(ゆび)が殆(ほとん)ど切(き)れおち、唇(くちびる)が中(なか)ばなくなり、體(からだ)のあちらにもこちらにもけがれた汗(あせ)がだら／＼と流(なが)れてゐたのであります。かう

いふ事(こと)が御縁(ごねん)となりまして立所(たちどころ)に實(じつ)に純情(じゆんじやう)な未(み)來(らい)往(わう)生(じやう)の信(しん)仰(かう)に入(い)られたのであります。さうして何等(なんら)この人(ひと)世(せい)に執着(しつぢやく)する事(こと)もなく、靜(じやう)かに平(へい)靜(じやう)の中(うち)に念(ねん)佛(ぶつ)をよろこばれたのであります、その亡(な)くなられる前(ぜん)約(やく)一(いっ)ヶ(げ)月(げつ)ばかり、それは丁度(ちやうど)本年(ほんねん)の三(さん)月(げつ)の事(こと)でありました。私(わたくし)は再(また)びこの人(ひと)の病(びやう)庵(あん)を訪(たづ)ねたのであります、これはしたり昔(むかし)と變(かは)つて、たい一目(ひとめ)みるなり、さすがに私(わたくし)は思(おも)はず出(で)て來(き)る驚(おどろ)きの聲(こゑ)をわづかにおさへ止(と)める事(こと)が出來(でき)た位(くらい)でありました。

それは、すでに唇(くちびる)の全(ぜん)部(ぶ)が壞(こ)れ、わづかに鼻柱(はなしら)が殘(のこ)り、兩眼(りやうがん)の目蓋(まぶた)は殆(ほとん)ど流れ、頭(うたま)といはず手(て)といはず足(あし)といはず、それはさながら餓鬼(がき)といはふか、血(ち)みごろの人(ひと)といはふか、私(わたくし)はこの場(ば)合(あひ)の感(かん)じを形(けい)容(よう)する言(ごん)葉(は)を持(も)たないのであります。

この方(かた)は私(わたくし)の姿(すがた)を見(み)るなり、その片腕(かたうで)を上げて私(わたくし)を拜(たま)まれるとともに、そ

の目蓋なき兩眼からは雨の如き感激の涙が流れ落ちたのであります。さうして口をついて出づる切れぐの言葉には、一道の強い光明が凡ての上に輝いてゐるのであります。

「先生有難ふ存じます。やうこそ御出下さいましたといふ言葉すらも御座いませぬ。たい私は地上の如來として、先生を拜ませて頂きます。先生、私は先生の上にあつてはほんたうのあの眞實の阿彌陀如來の御親を拜み上げる事が出来ます。先生もう目をつぶりますと私の體は已に金色の光明をはなつて居ります。先生、已に私の肉體の手はありませんが心の手はあのお淨土の蓮華の御座にかゝつてゐるのであります。先生、私は長い私の過去から現實の私をみつめます時に、どうしても如來善巧の御方便としか見る事が出来ないであります。曾ては運命に泣き曾ては父をうらみ母を恨み、人を呪ひ世を呪ふてゐました私でありました。私が、僅かにわた所

如來善巧
の方便

の知識も又ありあまる財産も却て悶々の根本であり、わづらひの種となるばかりでありました。さうして、泣き悲しみもただね苦しんで居つた私は、先生によつて眞實の親、それは永久に變らぬ所の御親、さうして私の一切の苦惱を打ち拂ふて、ほんたうに清淨微妙なたのしみのお淨土へ迎へて下される所の御親をしらせて頂いたのであります。思へば曾て私が恨み且つ託つてゐた凡てのものは、みな私をして誠の道に引き入れまことの親を知らしめたいとの親さまの御方便であつたといふことがはつきりと分らせて頂きました。先生、何んといふ巧みな御方便で御座いませうか、又何といたお慈悲で御座いませうか、又なんとした幸福者で御座いませうか、しぶとこの私で御座いませうもの、とても當り前な、(並大抵)な事ではこの深い寝りと執着から離れる事は出来なかつたのであります。私の昔の寫眞を見ますと私は相當な美貌の持主であつたのであります。さうして

嘗ては俊才といはれた身でありました。尙金に不足をしらないものでありますもの、とても心の問題や未来の問題などには目を振りむける暇も隙間もなかつたのが私なのであります。ここに私は何等の論理や研究をまじゆる必要を持ちません。たい私は如來の御前にひれふします。さうして一度は、せひとも救はずにはおかぬこの善巧方便のお手廻しに泣くばかりであります。この病は私の凡てを奪ひました。金の力もはた又智識の力もこの病の前には一たまりもなく打ちくだかれて仕舞ひました。御覽下される通りこの世からさながらの餓鬼であり地獄の罪人であります。さうしてなほ體の上だけでは御座いません。心の上にはとても包みきれないあらゆる恨みや憎みや、曾ては我身がかうなつた上は、オノレ凡ての人にこの病毒をうつさすにはおく可きかごまで思ひ且つ之を實行せんとした悪魔であり、呪ひの鬼であつたのであります。實に私の凡てはこの恐ろ

しい煩惱の猛火に焼け包まれたのであります。ここまでの強い悩みや苦しみや恐ろしいたくらみがどうも私を驅て今日のこの尊い身となして頂いたかと思ひますと、なんともお禮の申さう様が御座いません。先生、その後凡ての結婚の要求を謝絶したのも、又人里遠いこの庵でほんとうに隔離的な嚴重な生活をさして頂く様になりましたことも、思へば全く御佛の賜であつたのであります。先生、しぶといしぶとい私には、これだけの大きな鞭ちがなくては出来なかつたのであります。あゝ凡ては御はからひでありました。御方便でありました。御導きでありました。私はこの御導きの御化身として先生を拜む事をお許し下さい。さうして先生、何事も何事も凡てが明らかに分らせて頂くのはあのお浄土であります。あゝお浄土、……あゝ……先生……あゝお浄土……、そのお浄土がもう遠いのでは御座いません。あゝ幸福者は私で御座います……」

と再び聲をはなつて泣き出しつゝ、念佛と共に私を拜まれた時に私も又は
んどうに涙と共にこの方を拜まして頂いたのであります。

私は最後に親鸞聖人の聖語を三誦いたしたいと思ひます。

祖師聖人の和讃

釋迦彌陀は慈悲の父母

種々に善巧方便し

吾等が無上の信心を

發起せしめ給ひけり

(親鸞聖人の和讃)

嗚呼この恐ろしい病惱の上に如來大悲の善巧の方便を拜し得たる此の人の
如きは、そこには殆ど病もなく惱みもなく、手を擧ぐる所に淨土の寶樹を握
り、足の踏むところそこが瑠璃の大地であるとの靈感が湧き、歩一歩、日
一日、只、ひたすらに、やがて參らせて頂く御淨土に近くことを喜ぶのみ
であります。かくて物質的に凡てのものを奪はれたこの人は精神的に一切を

與へられた人であつた、未來を知らざる人達の只眼前の名利に飽いて得々た
るの人、それはたとへば農耕は、おろか、役牛として重い牛車を引かされ
て極度に酷使され虐使され、石のやうな硬い肉をした瘦牛が或る一種の肥育
法に依つて三週間乃至五週間のうちに忽ち二十貫三十貫と肉づけられて眞に肉
食牛として賣り出さるゝ憐な牛の如きものであるところのそれ等に比する
とき、此の病に依つて、生死の大問題に目ざめ、永遠の生命に氣付き、立ちど
ころに、如來大悲の誓願に托して、往生を必定と期し、心ゆく計りに念佛し
て、近づく淨土を待ち詫ぶるの身は、實に凡ての上に如來大悲の善巧の御方
便を拜せずには居られぬのであります。

この恐ろしい病の上に此の善巧の方便を拜し得る人の光榮は、世の何れの
ものゝ上にも亦之に比較るものはないのであります。

法然上人
仰せられ
て曰く

七 御親の如來と罪の子としての私

二〇〇

「無始より貪瞋具足の身なるが故へに、なかなか煩惱を斷ずるとかたきなり、この斷じかたき無明煩惱を、三毒具足のころにて斷せんとすると、喩へば須彌を針にてくたき、大海を芥子の杓にて汲み盡さんが如し、たとへ針にて須彌をくたき、芥子の杓にて大海を汲み盡すとも、我等が煩惱惡業のころにては、曠劫多生を経とも、佛にならんことかたし、その故は念々歩々に思ふことは、三途八難の業、ねてもさめても案しと按ずること、六趣四生のきづななり」。

されば、地獄は必定である、無有出離之縁は決して無理ではない。この地獄必定の私が本願の御目當であります。

我等が身を以て、いかでか、生死を離るべき、かゝりける時に、曠劫より已

恩愛も無
常も宿業

來、三途八難をすみ家として、銅然猛火に身をこがして、出る期なかりけるなり。悲しい哉や、善心は年々に随ひてうすくなり。惡心は日々に随ひていよくまさる身なるを、かたじけなくも、助けましますが、大悲の御親なのであります。

思へば恩愛と、無常と、宿業と、而して、恐ろしき罪惡との、體驗を得たる私共は、どうしても、私を引受けずには置かぬとの、眞實の御親と、さうして、參ることの出来る永久の親里であるあの極樂淨土を持つ事に依てのみ、只救はれるのであります。

理論を超
越したる
本願の大
悲

人間の小さき心に、弄ぶ所の學問や理論を超越したる大慈大悲の御親を知ること依てのみ、眞實の大安慰を得ることが出来るのであります。

限り無き親心……曾つて私は「心の狂へる子供に「タタカレ」ながら「ケラレ」ながら尙其狂兒の手にすがり付いて、「親であるぞ、親であるぞ」とさ

けんた、其母の姿を見た時に、私は、この肉身の親を透して、限り無き、大慈大悲の、眞實の如來の御親に、ふれる様な心地がしたのであります。大聖釋尊が、以テ無蓋、大悲ヲ衿ニ哀ス三界ヲ仰せられたのは、正しく、こゝであらねばなりません。……罪は受取り、功德は「ユヅル」……障は引受け、善根は與へる……、衆生苦惱ナレバ我苦惱 衆生安樂ナレバ我安樂ナリ、この親心に接した時、如何に疑ひ深き執念深きこの私も、この御慈悲の前には泣かずには……叫ばずには……稱へずには居られぬのであります。

口傳鈔の文

口傳鈔に……
「かゝるあさましき、三毒具足の惡機として、われと出離にみちたへたる機を、攝取したまはんための、五劫思惟の本願なるが故に、たい仰ぎて佛智を信受するに如す」
と仰せられてある。實に尊い事で申さう様がないのである。

思へば實に男女善惡の凡夫を、はたらかさぬありのまゝにて、「本願の不思議を以て、生るべからざるものを、生れさせればこそ、超世の悲願ともなづけ、横超の直道とも聞こはんべれ」である。されば男女善惡のありのまゝを引受けんとの仰せに、只、疑なく慮りなく打任せて御恩の御名にいそしむばかりであります。

この受け心も、稱へ心も、共に、やるせなき、如來の大御心の其儘が、映り、現れてくださったのであります。
「親は子と呼び、子は親を呼ぶ、聲は違へど「心は一つ」親の呼ぶ聲、子にしたふ聲」……この味は正しく此處であります。
何たる有難いことでありませうか、今や私共は、光明の海中に、大悲の願船に乗せられて、そよふく稱名の風に、心の塵を拂ひつゝ、西の岸邊に急ぐのみとなつたのであります。南無阿彌陀佛。

第五結尾

思はず話が色々な方へ流れましたが、然し私はお蔭でほんとうに喜ばせて頂きました。定めてあなたもお喜び下される事と信じて居ります。今まで申し上げました通り健康な人達はその健康の爲に却て生活に没頭して道を求むるの時間も亦内省の眼を開く機会も少ないのに比ぶれば病人としてのあなたは矢張りどうしてもお幸せものと申さずにはゐられないのであります。

今迄申し上げたところの凡ては確かにあなたの一々尤もだとうなづいて下さることゝ信じて居ります。

とても角ても一切を如來の御はらひに委せて、生きるも死ぬるもその凡てをすら忘れて、たいお念佛しつゝその恵まれた一日々をお送りなされる様

念願して止まぬのであります。合掌

最後に左の聖語を三誦して貴下の病牀に捧ぐることを致します。

清風寶樹をふくときは いつゝの音聲いたしつゝ
 宮商和して自然なり 清淨動を禮すべし
 一一のはなのなかよりは 三十六百千億の
 光明てらしてはがらかに いたらぬところはさらになし

(親鸞聖人淨土和讃)

如來淨華の聖衆は 正覺のはなより化生して
 衆生の願樂ことごとく すみやかにとく満足す

(親鸞聖人高僧和讃)

昭和四年六月八日

京都市外・深草・聲社にて

病牀に輝く法悦終

後 序

1106

この原稿の整理され終つたのは今日即ち七月十三日午後四時であつた、今度は相當に自分の或るものを打出した様な心持がするのである。

思へば水島君から頼まれてからざつと十ヶ月になる、相當な腹案はあつたが、實のミころ筆執る閑がなかつた、色々な責任感が四方から打寄せて来て何うしてもすまぬ氣になつたのミ、一つは或る因縁深い病人にこの書物を讀ませ度いミ云ふ願心から、丁度今度迄二回の時間を無理に作り上げたのである、それは濱口内閣が前内閣の實行豫算をさへ整理せんミする様な勇氣を奮ふてやつミ出來たのが前後で約四週間の執筆時間である、第一回は五月二十三日からミ第二回は七月七日からミであつた、然し思ふ様には中々行かない、第一回の京都隠遁には、聲社の移轉が崇つてほんたうに筆を執つたのは僅かに約一週間であつたが、是は行子の學校の問題が幸して筆記する時間があつたこゝが非常

な仕合であつた。

六月九日は殆き徹夜して一應の原稿を終り、そのまゝ富山縣から東京への傳道の旅に上つた、十七日東京を立つて下關に向ひ二十五日郷里に歸つたが、原稿は常に左右にあつても更に整理する閑がない、遂にそれから七月六日迄今日はノミ心の焦慮は止む時がないけれども、何うしても次から次への事務や來客に妨げられてたうノミ原稿を讀む閑さへなかつた。

思ひ切つてこの煩惱の火宅を逃れて此地別府森別邸にかくれたのが去る七月六日の夜でこれが實に第二回目の隠遁である、幸ひ雨は降るし涼しゆうはあるし靜かではあるし、初めてヘービをかけたがそれでもやはり相當に故障は出來て來る、今度こそミあらゆる不都合を覺悟して、死んだ積でせつせミ原稿を整理しかけて今日で約一週間其の間に編輯子が京都から來て矢の様な催促をする、これが又非常な刺戟で、すんノミ仕事が進むだ、けれど整理すれば整理する程益々整理するこゝろが多くなつて、ほんミに困

1107

つて仕舞ふた、然し御蔭で先づさつこ一應これで終を告げた。

暑さがぐつと増して来たけれども、そんなことは何でもない、一刻も早く此の小著のかけに待つて居る有縁の人々に差上げ度いこの念願に燃へて居るのみである。

こゝにこの四週間の時日を作る爲めに、講演や説教を御断りした方々へ第一に御詫を致させて頂きます、この小著に就ては聲社の編輯子并に教子行子の勞を多謝するに共に洗心學舎の海鳴瀬戸の兩君其他聲社一同の力添をも併て感謝致します。

尙ほ長友江林義存君より恩借した藤岡蠢々翁の遺書に負ふたところが多いいこをも拜謝致します。

最後に此の執筆の大なる力になつた森別邸を心よく貸し與へて下さつた森祐三郎氏に當別邸執事御幡武氏夫妻の懇切な御厚意を深く、感謝致します。

昭和四年七月十三日午後六時別府の森別邸に於て (觀)

昭和四年九月十日 印刷納本
昭和四年九月二十日 發行

「病牀に輝く法悦」 奥付

定價(上製) 金壹圓
並製 金七拾錢

製 複 許 不	著 者	住 賀 縣 三 養 基 郡 基 山 村	
	著 者	調 龍 叔	
檢 印	發 行 者	京 都 府 伊 賀 郡 深 草 町 福 稻 一 ノ 坪 十 四	
	發 行 者	調 鳳 龍	
發 行 所	印 刷 者	京 都 府 下 京 區 錦 夕 井 通 食 糧 上 ル 佐 女 半 井 町	
	印 刷 者	小 林 庄 太 郎	
發 行 所		京 都 市 外 深 草 町 福 稻 一 ノ 坪 十 四	
發 行 所		聲 社	
發 行 所		(振 替 戶 阪 三 一 八 〇 二 番)	

調龍 叡著 (パンフレット第百輯)

時弊救済の要道と佛教

定價 一部金參拾錢
郵 税金貳錢

内 容 概 梗

- 一、御大典を迎へて
 - 千載一遇の盛儀—至孝の御聖徳—朝見の御勅語に現はれたる御孝道—忠孝一致—國民同祖情合的忠義
- 二、現下の種々相
 - (イ) 政治界の紛争 (政治界の腐敗—只利を言ふのみ—政黨的内亂)
 - (ロ) 共產黨の出現 (共產黨の檢舉—インターナショナルの歴史—第三インターナ
- 三、佛教徒の覺悟
 - (イ) 佛教より觀たる國體 (腐敗は毒菌養生の素地—
 - シヨナルの根本主義—レーニン曰く—愛と親疏—國體の愛護)
 - (ハ) 暴力團の流行
 - (ニ) 直訴狂の頻出
 - (ホ) 國民精神の健康増進 (毒菌の征服—永久養生—信仰の缺乏—精神的健康増進の要諦)
 - (イ) 佛教より觀たる國體 (腐敗は毒菌養生の素地—

傳統相承—傳統相承の信仰
法脉血脉の相承—信仰的國體)

(ロ) 二諦相資の宗風 (淨土眞宗の眞俗二諦—家庭道徳國家道徳社會道徳—二諦の相資相依—信仰と人道との相資—合法久住利樂有情)
(ハ) 感恩の生活 (思想と思想—思想の彈壓—思想と智識と環境—君臣の因縁—至誠の發露)

調龍 叡 著

佛教より觀たる小作問題

四六版洋本函入
定價金壹圓五拾錢

我國の社會問題中殊に長き歴史を有し、且解決至難なるものは農村に於ける有産無産の兩階級の争闘である。それは農村にはたゞ机上の空論のみでは解決されない程傳統と舊慣とがあるからである。然るに農村問題は輓近あまりに無反省に論議せられつゝある。その結果はなほだしきは隣保共同の美を以て誇る農村が修羅の巷と化し、血なまぐさき風さへ吹き、天惠の良田は荒み、收め獲るべき黄金の實は、憐れ煩悩妄念の雜草となる。而して我等はこの問題の裏面の跳梁するものを見のぼしてはならない。今著者はその體驗に依り佛教の立場より敢然として公正なる批判を試む。而して言々句々みな信仰の進りである。

發行所 京都市外深草町一ノ坪十四番 振替大阪三一八〇二番 聲社

發行所 京都市外深草町一ノ坪十四番 振替大阪三一八〇二番 聲社

調龍叢
個人說教雜誌



一月一講

一ヶ年十二册

定價壹圓貳拾錢

(郵稅共)

著者と各地御同朋との月々の御悦びの雜誌であります。「説教」と「體驗と感想」と「行住坐臥」と「御同朋の聲」とはその内容であります。——さうして御淨土參りの道連が一人でも多い様にとの念願より外には何もありません。

發行所

京都市外深草町一ノ坪十四番
振替大阪三一八〇二番

聲

社

終

